

筆道資料の探訪

筆の変遷

正倉院残存の筆（雀頭筆）と空海の改良筆とが相違することは、藤原行成の「白染天詩巻」からもうかがえます。この巻の末尾に、

『寛仁二年（一〇一八）八月

十一日 書之以経師筆点画失

所来者不可笑』

とありますが、これは行成が日常使用している筆でなく、写経用の筆で書いたので普通の作品とは相違しているわけを付記したものです。これによって奈良朝以降広く使用されていた写経筆とは別種な筆を行成が使用していたことがわかります。

これに行成が崇敬していた空海によって伝えられた大師流筆に、自家用の新しい独創を加えて時代に適應する筆を作りあげていたと思われます。

一七世紀に著わされた「雍州府志」に本朝の筆道専ら青蓮院の家風を宗とす 故にその用いる筆仕御家様筆ということ述べています。なおこの時期においても筆の主流は巻筆（有芯筆）でした。（熊野町史通史編 六九〇頁）

平安時代から江戸時代までいろいろの書風が出て多くの書の

流派が生まれました。それによってそれぞれの書流に適應する筆が考え出されましたが、これは製筆技法の上からみれば空海傳來の技法から一步も進んだものではありません。ただ鋒（穂）の長短精粗の別があっただけです。

結局、日本では八世紀以来約九百余年間も正倉院式の構造をもつ有芯筆が使用されたということになります。

江戸時代になって、唐様書道を愛好する書家が多くなりました。彼らの間では当時一般に使用されていた有芯筆以外の水筆（さばき筆）の使用が始まったのです。

さばき筆（無芯筆）は元禄時代に細井広沢が中国の製筆法を研究して完成したもので、以降わが国ではこの筆を愛用するものが出て、唐様書道が流行する

のです。しかしさばき筆が用いられたのは限られた範囲で、この筆が一般に普及するのは明治になってからです。

◀元禄時代に刊行された手習用集（習字手本）

